

### 動物表象の文化論的考察：日韓における人間と動物の関係に関する研究動向

朴, 庚卿

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2013-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009977>

# 動物表象の文化論的考察

## —日韓における人間と動物の関係に関する研究動向—

人文科学研究科 日本文学専攻  
国際日本学インスティテュート  
博士後期課程3年 朴 庾 卿

### はじめに

人間にとって動物の存在は、単に「食料」や「道具」としてだけではなく、神話や説話の主人公のように「崇拜の対象」や「象徴」になるなど、人々の行動様式や道徳観などに影響をあたえる「重要な他者」としての表象でもある。様々な動物が多くの国の建国神話、始祖神話に登場することからもわかるように、人間は古代から動物を用いて、当時の様々な生活文化や宗教的な観念を表現してきた。このような意味から、それぞれの社会における動物の存在は、各社会の文化などを映し出す「鏡」となり、これを通して当時の人々の意識や世界観、または生活相の一部を窺い知ることができよう。

人間と動物の関係は地域によって異なることはいままでもないが、近代以後、私たちにも強い影響力をもつヨーロッパにおける人間と動物の関係は、たとえば、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」（新共同訳『旧約聖書』「創世記（1:24）」）という一文にあらわれているように、人間（文化）、動物（自然）が二元論に基づいて対立する存在として認識されていた。つまり、大雑把にいえば、ヨーロッパの動物観の基本は古代から近代に至るまで蔑視・敵対視・道具視であり<sup>1</sup>、とりわけ、人間は動物に境界をもうけ、両者の間は絶対に越えられないものとして位置づけられているようにも思える。特に、人間を「主」とし、動物を「従」とするような関係性が「神の言葉」によって正当化されたキリスト教的な認識は、現在の社会にまで影響を及ぼしており、それが人間の動物支配を正当化してきたと批判する声もある<sup>2</sup>。

このような関係性から動物は、人間の都合で愛玩化されたり、食肉のために飼育されたり、人間によって管理・統制されるべき存在とみなされることが多かった。しかし、「人間と動物」の関係は必ずしも上述したような関係のみではない。人間と動物を主従の関係のみからではなく別の尺度を用いることで、より多様な関係の相が見えてくるはずである。つまり、生物学の教科書的な分類を取り上げるまでもなく、人間もまた動物である以上、池田光穂のいう「人間の鏡」<sup>3</sup>としての動物という視点に学びながら、「人間と動物」の間に引かれた既存の境界線を相対化することで、人間と動物の多様な関係が浮かび上がってくるはずである。

このような問題関心からすれば、人間社会における動物を総合的に検討し、新たな人間と動物の関係を再考するためにも諸学問分野をまたがる学際的・総合的研究が益々必要になってくると思われる。

本稿はこのような問題意識から、人間と動物が長い間築いてきた関係のなかで創られた、そして現在も新たに創られつつある文化を考察するための手がかりとして、まず先行研究の検討とこれからの課題を提示するものである。以下では、主に人間と動物の関係に関する学際的視点からなされた先行研究を検討することとする。

### 一、日韓における研究会および学会の動向

日本における人間と動物の関係に関する学際的研究は、「動物観研究会」（1990）の発足がそのはじまりであり、5年後、「ヒトと動物の関係学会」の設立とともに本格的に展開された。2004年からは「ヒトと動物の

1 池上俊一（2008）『儀礼と象徴の中世』（ヨーロッパの中世8）岩波書店。

2 林良博他編（2009）『動物観と表象』（ヒトと動物の関係学第1巻）岩波書店、1～17頁。

3 池田光穂「野生動物とのつきあい方」上同、228～232頁。

関係学会」と「動物観研究会」のジョイント月例会が1年に数回開かれ、さらに活発な研究が行われるようになった。一方、韓国では「人間動物文化（Human Animal Culture）研究会」（2009）の発足をきっかけに、人間と動物の関係に関する学際的研究が本格的に行われるようになった。

これらの研究会や学会が共有する課題やその活動についても簡単に触れておこう。まず、現代人が動物に対してどのような意識や態度を持っているかを明らかにすることを目的とし、動物観の学際的研究を試みている「動物観研究会」は、動物観の比較を通して諸外国の異なる文化圏に生きる人々との思想や文化の相違を理解するための研究に取り組んでいる学際的研究会である<sup>4</sup>。毎年行う公開セミナーの発表内容を中心に、研究誌『動物観研究』（1990年創刊）を発刊しているが、2004年から「ヒトと動物の関係学会」とジョインし、1つのテーマを決め、報告・討論を行っており、2006年（11号）からは年3回発行のヒトと動物の関係学会誌の1つとして刊行されている。

林良博（東京大学農学部教授）を発起人代表として設立された「ヒトと動物の関係学会」は、①動物とヒトの間の現実的課題をいかに解釈し、その対策を講じるかという目的指向的な方向と、②動物そのものの特性や人間自身を知り、私たちの知識を豊かにしたい知的指向的な方向を持ち、ヒトと動物の新しい文化を創造することを目的として挙げている<sup>5</sup>。なお、学会事業として学術大会および研究会、公開シンポジウムなど、毎年数回の学術大会を開催し、現在1年に3回学会誌『ヒトと動物の関係学会誌』（1995年創刊）を発行している。1999年12月31日現在、会員数1300名を超えており、会員は動物を研究対象とする自然科学系の研究者のみならず、社会科学系、人文科学系の研究者も多数参加している。そして、2003年からIAHAIO（International Association of Human-Animal Interaction Organizations、ヒトと動物の関係に関する国際組織）のナショナルメンバーになり、人と動物の関係に関する国際的研究を行っている<sup>6</sup>。

一方、韓国における人間と動物の関係に関する学際的研究は、2009年韓国研究財団の学際的融合研究として「人間動物文化研究会」が設立されることにより本格的に始まった。同研究会では、考古学、歴史学、獣医学、生態学、哲学、文学、民俗学、社会学分野の研究者が参加して、人間と動物の関係に関する学際的な研究が行われている<sup>7</sup>。設立背景には、海外の人類動物学（Anthrozoology）または人間動物研究（Human Animal Studies）という融合学問の影響があるが、これらの研究を参照しつつ、韓国における人間と動物の関係の再考と、人間と動物のより良い環境での共存をはかることが主な目的である<sup>8</sup>。なお、研究結果の学術的・大衆的疎通に重点をおき、セミナーと国際学術大会を開催しており、そこでの発表内容をまとめ、2012年、はじめての研究集『人間動物文化』が発刊された。

「人間動物文化研究会」のいう人間動物文化研究の意義は、学問内・外の二つの視点から述べられている。まず、学問内的模索としては、動物観と人間観の再成立を前提にしている。人間と動物の関係の中で人間を把握し、生命と生態の観点から新しい人間観を求めており、そのために人文学と自然科学そして社会科学の方法の観点から学際的研究を目指している。次に、学問外的模索として、現実指向の面では「文化コンテンツ」としての可能性を挙げており、その具体的研究主題として、たとえば「虎」の場合、朝鮮半島の南北の学会の協力が必要であるという側面から、南北「統一人文学」として側面もあると述べている。また、固有性の模索と主体性の指向という面では、「韓国学と人文学の結合」は必然的であり、李御寧責任編集の『文化で読む十二支神』シリーズ（韓中日比較文化研究所、2009～2012）からもみられるように「東アジアの文化コード」とも密接な関係があるとしている<sup>9</sup>。

4 「動物観研究会」ホームページ（<http://www008.upp.so-net.ne.jp/ATAnimals/>）参照。

5 「HARs ヒトと動物の関係学会ホームページ」（<http://www.hars.gr.jp/index.htm>）参照。

6 同学会は、2006年日本学術会議協力学術研究団体に指定された。韓国の場合は「창과동물매개치료연구센터（Center for Chang-pa Animal Assisted Therapy）」が2006年からIAHAIOに参加、動物介在治療活動などの研究実績を発表し、2012年に韓国からは初めて国際会員として推挙された。「창과동물매개치료연구센터」は知的障害学生が通う慶北栄光学校の学生や精神的慰めが必要な患者や高齢者などに活用できるとし、2006年から研究活動を広げ2008年に研究センターを設立した。特殊教育、リハビリ医学、獣医学、心理学専門家の学際研究が行われている（ホームページ [<http://www.cpanimal.com/Main>] 参照）。

7 人間動物文化研究会（2012）『人間動物文化』이담 books 参照。

8 同上、9～10頁参照。

9 同上、38～39頁参照。

以上、日韓における人間と動物の関係に関する研究会および学会の目的や研究の方向性などを検討してみた。それぞれが学際的研究を求めているという共通点はあるものの、その方向性においては異なる点がみられた。つまり「動物観研究会」は主に現代日本人の動物観に、「ヒトと動物の関係学会」は現代社会における問題解決に焦点を置いた傾向が見られる。一方、韓国の「人間動物文化研究会」は、動物観と人間観の再成立を前提にするという学問内的面においては同様にみられるが、「動物観研究会」と「ヒトと動物の関係学会」が取り上げた現代社会において動物が抱いた問題などについては扱っておらず、人文学的側面、つまり、人間と動物が共存するなかでの「文化」として、また、「民族の象徴」としての動物という「韓国学」としての側面をも強調している。とりわけ、日中韓における動物文化考察を通して「東アジアの文化コード」を描こうとした面では、「動物観研究会」の外国の異なる文化における動物観比較と一脈相通ずる面もある。

以下では、それぞれの研究・学会で扱っている研究テーマを分析するとともに、両国における主な研究事例を検討する。

## 二、人間と動物の関係に関する先行研究

人間と動物に関する学際的研究は、前述したように、日本の場合は現代社会に重点をおいた研究が多い傾向がみられる。とりわけ、日本において人間と動物に関するはじめての学際的研究誌としてみられる『動物観研究』においては2003年からそのような傾向がみられ、現代社会における動物の役割と動物保護に関するテーマが大半を占めている。たとえば、動物介在活動、アニマルセラピーといったAAT (Animal Assisted Therapy)、AAA (Animal Assisted Activity) など、人間のための医療や心理治療、盲導犬の動物介在の有用性や効果に関する研究や動物保護、ペットなどがそれである。

『動物観研究』で扱ったテーマを具体的にみると、創刊号(1990)には、「動物観研究のすすめ方について」と共に「新聞記事をもとにした日本人と鳥獣の関係」(安田直人)や「動物の好みと年齢-上野動物園の入園者調査から」(石田おさむ)などの実証的な研究報告が掲載された。1991年と1992年には、「日本人の動物に対する態度の類型化について」と「日本人の動物に対する態度の特徴について」の研究報告があった。これは、アメリカ社会における動物観に関する研究「S.KELLERTの態度類型の方法」をもとに、日本人の動物に対する態度の類型化とその特性についてアメリカと比較することで明らかにしようと試みたものである<sup>10</sup>。そのような研究を踏まえて、2003年からは「環境行政における動物の保護管理の考え方」(東海林克彦)をはじめとし、現代社会における動物について本格的に取り上げはじめた。2004年にはコンパニオンアニマルやアニマルセラピーに関する実験や調査報告が集中して行われ、現代社会における動物と人間の共生についての考察が行われた<sup>11</sup>。翌年からは、ペットに焦点を当てた研究が行われた。とりわけ、「戦後日本におけるペット文化史」(渡部知之、2005)では、ペットを家族の一員として扱う傾向は1970年代末頃にほぼ現在と同じ水準になっているとした上で、表面的にはペットとの関係が身近なように見えても、実際には人間に飼育される。すなわち支配されることには変わりはないと指摘した。また「現代日本の家庭におけるペットの位置」(石田おさむ、2008)では、アンケート調査結果に基づき考察を行い、家族一員としてペットの概念と同時に新たな世代を中心に家族とは別の次元での存在(「超家族」)になりつつあると指摘、新たな関係としてペットの存在についての検討を今後の課題として示した。2009年には「ペット市場と動物観」(岩倉由貴)や「ペットロスに関する電子掲示板分析」(松田光恵)が載せられるなど、家族の一員となったペットと、それによる社会問題についての研究が行われた。その他、外国(欧米中心)における動物観研究や動物園や文学に登場する動物についても扱われている。また、テレビ、マンガ、アニメのなかにあらわれている動物について、擬人

10 その結果は日本『造園雑誌』55巻5号(1992、19～30頁)に二つの論文で載せられている。

11 以下全て『動物観研究』No.8(2004)。「職場にけるペットの介在効果についての実験的検証」(坂本匠他、33～40頁)、「福祉施設でのAAA・AAT実施のためのアンケート調査」(長田一将他、41～44頁)、「精神科精神疾患患者におけるペット飼育の分析-摂食障害との比較から」(横山章光他、45～48頁)。



化された動物という視点からの考察も行われた<sup>12</sup>。

全体的にみると、日本の動物観をまとめた上で、現代社会に視点をおいて総合的視点からの研究が行われたことがわかる。一方、韓国では、現代社会のなかで動物と共生する方法や問題解決に関する研究は、個別研究分野であり、まだ学際的研究としては扱われていないことが現状である。

次は、人間と動物に関する学際的研究事例を、人間と動物の関係を総合的視点から扱ったものと、特定動物を主題に関連分野を扱ったものに大きく二つ分けて検討する。まず、総合的視点から学際的研究をまとめた研究書籍としては「ヒトと動物の関係学」発刊の『人と動物の日本史』（吉川弘文館、全4巻）と『ヒトと動物の関係学』（岩波書店、全4巻）が挙げられる。『人と動物の日本史』を巻ごとに簡単に紹介すると、1巻「動物の考古学」（西本豊広編、2008）は、縄文・弥生から近世までの日本人の動物観の移り変わりを、土製品や石製品、動物骨や動物絵画など多彩な考古学資料で描き、狩猟・漁撈・肉食の変遷やイヌ・ウマ・ブタ・鳥など、家畜と日本人との深い関わりについて考察した。2巻「歴史のなかの動物たち」（中澤克昭編、2009）は、儀礼や政治的演出に組み込まれた馬や犬、食料や動力として利用された牛や豚、乱獲と保護の合間で翻弄された鯨や鹿など、歴史上に刻まれた人と動物たちの関係性を多面的に描き出し、新たな歴史叙述の可能性を模索した。3巻「動物と現代社会」（菅豊編、2009）は、競馬文化導入の背後にあった国家戦略、「自然」な食肉をめぐる生産者と消費者の葛藤、食虫文化が形成する新たな共同体など、近代から現代へ発展・変貌を続ける人と動物の様々な関係性を描き、その未来像を模索した。4巻「信仰の中の動物たち」（中村生雄、三浦佑之編、2009）では、神話や伝承の中で描かれ、信仰の対象となった動物たちに対する日本人のまなごしは、歴史の中でどう変化したのかをアニミズム、殺生や動物飼養などを再検討し、宗教・信仰の視点から動物との向き合い方を考察した。

『ヒトと動物の関係学』の1巻「動物観と表象」（奥野卓司他編、2009）は、様々な（儀礼習俗に現れているアニミズム、トーテミズム、各宗教、芸術芸能）表象にあらわれている動物観を読み解き、その動物観が今日の社会や文化のなかでもつ意味を考察している。動物側の客観的分析ではなく人間側の語りを中心とした視点から、人間が関わってきた動物たちを各民族が見て表現した姿として「表象」をとりあげた。2巻「家畜の文化」（秋篠宮文人他編、2009）は、家畜の歴史と文化を読み解き、その背景にある民族文化や宗教、現代社会との関わりを探究しており、家畜を食、宗教、遊戯、改良など多面多層的な視点を当て、家畜としての世界各地の多様な文化を紹介している。3巻「ペットと社会」（森祐司他編、2008）では、ペットの歴史、変容するペット（少子化社会の中でペット）、アニマルセラピーなど、現代社会においてペットと関わる際の問題点を明らかにし、解決のヒントを探った。4巻「野生と環境」（池谷和信他編、2008）では、現代におけるヒトと野生動物の地域諸相、グローバル化する「動物保護思想」と地球環境問題をとりあげ、地球環境のなかで人間と動物の関係を考える内容で構成されている。

一方、韓国の「人間動物文化研究会」が4回のワークショップでの発表内容をまとめた『人間動物文化』では、最初の研究報告書であるだけに、研究課題の提示、融合的研究の事例を紹介した。

Part 1では、人間と動物の関係に関する融合的研究の可能性を提示した6本の論文が載せられている。まず「人間と動物の関係に関する人文的検討」（이동철, Lee Dong-chul）では、人文学の危機に対する対応としての人間動物文化について述べ、先行研究をまとめた。「人と動物の間」（김찬호, Kim Chan-ho）では、人間の文明における動物の位相について述べ、動物と区別される人間の生物学的特徴や人間らしさの手係りについて検討し、問題を定義した。「先史時代の動物と人間の生活」（조태섭, Cho Tae-sub）では、先史時代の洞窟遺跡から時代別動物種類を把握することで当時の気候変化や生活変化が考察できるとし、歴史学や考古学、社会学などの連携の必要性を提示した。「歴史文献と電子地図を利用した生態史研究方法」（김동진, Kim Dong-jin）

12 以下全て『動物観研究』。「村上春樹における『動物』の使われ方」（石田おさむ、No.9（2004）、17～20頁）、「戦後の日本マンガにおける動物擬人化の系譜と動物観」（細川博昭、No.13（2008）、7～14頁）、「擬人化された動物CMについての探索的研究—ケータイCMを事例に—」（石山玲子、No.16（2011）、39～47頁）。ちなみに、石山玲子の動物CMに関する他の論文は2009年に『ヒトと動物の関係学誌』にも掲載された（「テレビCMにおける動物描写の内容分析」vol.23（石山玲子、松田光恵、48～59頁））。

では、朝鮮時代に多く編纂された地理地に記録されている内容をデータベース化することで、当時の人々の生活文化などを考察することができるとしている。現在、地名、地理誌、民謡、人口・耕作の項目がデータベース化されており<sup>13</sup>、それを利用して朝鮮時代の「動植物図鑑」などを作成することができ、生活文化論的研究にもつながると述べている。

「動物疾病に関する人間の認識と対処方案を通してみた人間動物文化」(천명선, Chon Myong-sun) は、動物の疾病に対して人間は自分たちと同じように「苦痛」という側面から意味を持っているのか、人間と動物の関係の変化がその意味に及ぼす影響はないかという問いから出発する。ここでは、現存する最も古い馬医学および牛医学書籍『新編集成馬醫方附牛醫方』(1399)のなかから、動物疾病に関する記録を拾い出し当時の治療や対処案を検討することで、人々の認識を考察した。さらに、歴史、医学、科学および文学などの関連資料の検討も行い、古代から現代までの動物疾病に関する認識調査は、動物に対する認識変化研究にもつながると述べられている。「動物談研究からの民族動物学もしくは動物文化学の可能性」(최원오, Choi Won-o) では、今まで行われてきた動物談研究を通して動物と人間が作り上げた特別な文化的意味が含まれていることを明らかにすることができるとし、人間と動物の関係を文化的関係として設定する民族動物学、または動物文学の観点から考察することで動物談の体系的分析が可能であり、また諸学問の知識や方法論を加え、さらに多様な観点から具体的な研究成果が得られるとした。

Part2では、「人間と動物、なじみの関係に新たな視線」というテーマで3本の論文が載せられている。「動物の道徳的地位と種差別主義」(최훈, Choi Hoon) では、①人間は動物とは異なる排他的特性を持っている②生物学的に人間種を特定させてくれるDNAがある③人間種の構成員たちは特別な紐帯感がある④契約に参加できる人間だけが道徳的考慮の対象である、という種差別主義者の主張を批判した上で、動物の幸せや苦痛と関連して特に飼育や肉食、動物実験は最も代表的な種差別主義的であると、動物の道徳的地位を主張した。「我が国の古い絵に表れた動物相：朝鮮時代動物画の流れと特徴」(이원복, Lee Won-bok) では、人類が残した最も古い絵に登場する動物は、トテムの対象、家畜、鳥類などの持つ象徴が文化誌的に調和をとりながら芸術の素材として描かれてきたとした上で、朝鮮時代の絵画を前中後期に分類・分析し、韓国動物絵画の特徴を考察した。「動物遺存体を活用した融合研究—韓国虎絶滅史と虎系統遺伝融合研究の事例」(이항외, Lee Hang) では、動物遺存体を活用した遺伝的研究を扱った。遺伝的研究技法を動物考古学および歴史学的の研究と連携することで先史時代と歴史時代の人間と動物の関係や動物家畜化研究にも応用できるとし、朝鮮半島から滅種した虎、豹、狼、狐、鹿などの動物個体群の進化的起源と系統分類学の実態を追究するために重要な役割を果たすと述べた。たとえば、動物が絶滅していく過程のなかで動物に対する社会的認識がどのような役割をしたのか、その歴史的脈絡を理解することができ、このような知識は未来社会において人間と動物の間系のあり方を設定するための知識規範になるとした。とりわけ、韓国を代表する象徴的動物といわれている「虎」に焦点を当て絶滅してきた歴史的背景などを追い、韓国虎の保全と復元に向けて研究を進めていきたいと述べた。

以上、人間と動物の関係を総合的観点から扱った研究を検討した。『人間動物文化』は人文学と諸学問が融合的に連携された研究への挑戦を提案しており<sup>14</sup>、人間と動物の関係を現在社会より、古代からの関係に重心を置いた傾向がみられた。一方、『ヒトと動物の関係学』と『人と動物の日本史』のシリーズは、人間と動物の関係を通時的・共時的観点からの考察が行われている。つまり、『人と動物の日本史』の場合は、人間と動物の関係を縄文・弥生から現代にいたるまでの歴史の流れに沿って考察しており、『ヒトと動物の関係学』の場合は、人間と動物の関係における様々な様相を取り上げた共時的視点から構成されている。とりわけ、韓国の学際的研究ではまだ扱っていない現代社会におけるペットの問題やアニマルセラフィなどの動物介在治療まで扱っている。また、東アジアにおける動物文化研究に重心を置いた韓国とは対照的に、世界各民族の動物に関する様相や文化も取り入れることで視野を広げた研究成果が得られているといえる。

13 「朝鮮時代電子文化地図システム」(<http://ataskorea.org/historymap/IdxRoot.do>) 参照。

14 「動物疾病に関する人間の認識と対処方案を通してみた人間動物文化」(천명선)、「歴史文献と電子地図を利用した生態史研究方法」(김동진)、「動物遺存体を活用した融合研究—韓国虎絶滅史と虎系統遺伝融合研究の事例」(이항외) など。

次に、特定動物に関する研究事例としては、韓国の場合、李御寧責任編集の『文化で読む十二支神』シリーズが挙げられる。2009年「호랑이 (虎)」をはじめとし、2010年には「토끼 (兎)」と「용 (龍)」、2011年には「뱀 (蛇)」、「말 (馬)」、2012年「양 (羊)」が出版されており、その他の動物の巻も順次出版される予定である。執筆には、韓国側は韓中日比較文化研究所所属委員や韓国比較民俗学会会長（崔仁鶴、Choi In-hak）、国立民俗博物館長（千鎮基、Choen Jin-ki）が、日本と中国側は国際日本文化センターの教授ら、法政大学国際日本学研究所教授などが参加し、神話・伝説、絵画、文学、宗教、動物のイメージと象徴性（現代中心）といった五つの分野における三国の話が綴られている。韓中日比較文化研究所の所長である李御寧はシリーズの最初の一冊目の「虎」のなかで、「一匹の虎が証言する韓中日の文化を広げて行けば、龍と鳳凰、虎で形成されたアジア三国の生態地図文化地図が描かれる」とし、「東北アジアの新たな文化パラダイムが展開される」<sup>15</sup>と述べており、三国の十二支神の文化比較を通して「東アジアの文化コード」を描くことを試みた。

また、動物民俗学者千鎮基の『文化の秘密を解くもう一つのカギ—韓国動物民俗論』（民俗院、2003）も十二支動物を扱った。韓国の干支文化は、韓国人の経験と知恵が一つになった民の総合的思考形態であり、生活哲学の観念体系をあらわしているとし、民俗学的研究だけでなく、考古学的発掘と美術遺跡、遺物、加えて動物生態学的視点も入れ、干支の象徴性の考察を試みた。内容はⅠ動物民俗論（はじめに）、Ⅱ十二支の構成と歴史的展開様相、Ⅲ干支動物の文化的表象と象徴体系、Ⅳ干支動物の相性と相剋関係、Ⅴ文化の秘密を解くもう一つのカギ、動物象徴（おわりに）に構成されており、動物生態学的視点を入れたとしているものの、どちらかといえば、民俗学的視点に偏っている傾向がみられる。また上記の李御寧編と異なり、主に韓国を中心に考察しており、そのような意味では李御寧編の干支の動物に関する研究書が一步進んだ成果であるといえよう。それ以外も特定動物を扱った研究書の多くが干支の動物に集中しており、神話・説話や民俗学的な視点から書かれたものが多い。

一方、日本では、上記の学術的研究視点や比較文化的視点から日中韓三国を扱った研究書は見つからなかった。しかし、民俗学的観点から特定動物を扱った研究は多く行われてきた。たとえば、1968年から法政大学出版局が発行している『ものと人間の文化史』シリーズは日本人に親しみのあるものをはじめとし、動物（虫、魚類、哺乳類など）、植物などを文化史的観点から考察しており、現在、161巻まで発刊されている。なかには、日本の神話や信仰の対象になった動物、熊、蛇、狐などの動物を多数扱っており、たとえば、『敬われてきた熊』<sup>16</sup>は、第1部 熊と人里、第2部 熊と人間が結び結ぶ精神世界、第3部 文芸にみられる熊に構成され、神としての熊、熊と人々の関係など、民俗学の観点から書かれている。また『狐—陰陽五行と稲荷信仰』<sup>17</sup>は、第1章 狐の生態、第2章 日本の狐、第3章 中国の狐、第4章 陰陽五行思想と狐、第5章 稲荷の狐、第6章 蛇から狐へ—私見稲荷信仰、第7章 狐と火（その一）、第8章 狐と火（その二）に構成されており、日本における稲荷信仰として狐を生態学的視点や中国の狐からの影響なども含めて民俗学的観点から考察した。その他、身近な動物としての犬や猫などを扱った研究書も多く出版されている<sup>18</sup>。

このように、特定動物に関する研究は両国とも民俗学的観点からのものが多くみられ、文化的視点からの研究は韓国の場合、始まったばかりだといえよう。さらに韓国人の動物観を総体的に考察した研究はまたままっておらず、明確な研究状況が分かりにくい状況である。今後、人間と動物の関係の総合的研究においても韓国の研究会では「韓国における動物」や「韓国人の動物観」など国際的比較のためのたたき台となる韓国

15 李御寧編（2009）『文化で読む十二支神 虎』생각의 나무, 12～13頁。

16 赤羽正春（2008）『敬われてきた熊』（ものと人間の文化史144）法政大学出版局。詳しい目次：第1部 熊と人里（鳥海山のシシオジ・金子長吉と熊/朝日山麓の小田甚太郎熊狩記/大鳥の亀井一郎と熊/豊山麓藤巻の小椋徳一と熊/里と熊/熊と食/熊の捕獲/狩りの組織と村の変貌）第2部 熊と人間が結び結ぶ精神世界（熊・母系・山の神熊を敬う人々/山中常在で去来しない山の神、大里様と熊/闇の支配者/熊の霊/熊の頭骨/熊の像/熊祭りの性格）第3部 文芸にみられる熊。

17 吉野裕子（1980）『狐—陰陽五行と稲荷信仰』（ものと人間の文化史39）法政大学出版局。

18 大木卓（1979）『猫の民俗学』田畑書店。アーロン・スキュブランド（2000）『犬の帝国』本橋哲也訳、岩波書店。岡田生雄（1980）『日本人の生活文化史①犬と猫』毎日新聞社。木村喜久弥（1976）『猫—その歴史、習性、人間との関係』法政大学出版局など。韓国の場合、金宗大（1977）『十二支の民俗と象徴①犬』国学資料院などがある。目次：Ⅰ. 犬はいつから家畜化になったのか。Ⅱ. 韓国の犬とその特性と性質 Ⅲ. 夢と人生の運としての犬の象徴 Ⅳ. 歳時風俗における犬 Ⅴ. 民俗文学における犬 Ⅵ. 考古美術品にあらわれた犬の表現 Ⅶ. 民俗的観点からみた犬の意味。



内の研究をまとめることが必要であろう。その上、李御寧の動物比較文化論のように、三国の文化図が描ける他国との比較研究を進めていくことが期待される。

### 三、学際的な研究の試みと研究課題

ここまで、日本と韓国における人間と動物の関係に関する学際的研究の動向を検討した。その結果、韓国より20年ほど進んでいる日本の場合は、「日本人の動物に対する態度の類型化」を試みた研究をはじめとし、歴史的、考古学的、神話・信仰の観点から踏まえて現代社会において人間と動物の共生と問題点の解決についてまで、総体的にまとまった研究が行われている。また世界各国の動物観を考察するなど、幅広い視点からの研究が行われているものの、最も近い韓国に視点を置いた研究は少ない。一方韓国の場合は、干支の動物を中心とした民俗学観点からの研究が多く行われており、学際的研究においても、現代社会に焦点をあわせた人間と動物という観点からの学際的研究例はまた乏しい状態であり、それが今後韓国における人間と動物に関する研究として期待されるところでもある。また、日韓における人間と動物の関係に関する研究は、その方向性は少々異なる点があるものの、同じ対象を扱っている研究分野である。このような研究は、今まで欧米に基準をおいた西洋との比較研究が多く、アジアのなかでの比較研究が乏しいということからもそれぞれ行われている日韓における研究を一つにリンクさせる必要があるだろう。

このような視点から筆者は、日本と韓国において、他の動物よりイメージの相違が明確にあらわれる「猫」を中心に、口承文芸（ことわざ、昔話）や古代文献から両国における猫のイメージや表象を考察し、文化比較を試みた<sup>19</sup>。ここでは詳しい説明は省くが、考察結果を簡単にまとめて紹介する。

日本の猫の場合、宮廷では人間並みに愛された愛玩動物として、庶民の生活では、鼠除けや魔性、畏怖としてあらわれた。そのイメージは江戸時代の流行神、ペットブーム、そして江戸時代に人気のあった歌舞伎に猫が登場することで、一般に広く猫の「人格化」「神格化」が行われ、身近な存在として定着していく。一方、猫に対する負のイメージが強くあらわれる韓国の場合は、儒教が国教であった朝鮮時代を背景に「道徳的価値」（儒教的価値観）に絶対的な基準を置き、猫の行動を道徳的に判断し、または、批判する対象を猫に見立てたことなどから、猫に対するイメージが画一的に形成された側面があるとみられた。動物表象から当時人々の社会背景や文化が読み取れるということは言うまでもないが、同じ動物に対する異なるイメージの発生は、その国の時代背景と宗教の相違にあるということがわかった。

このように猫の表象を考察することで、当時人々の猫に対する認識や象徴、その背景にある社会や文化、宗教的観念をも考察できるという可能性がみられた。さらに、この結果を踏まえながら、現代社会における動物表象を考察することによって通時・共時的観点からの研究が可能となるだろう。

このような観点から、特定動物に関する学際的研究の一環として筆者は、韓国において象徴的イメージや役割などがまだ総合的にまとまっていない「猫」について通時的観点から考察を試みた。上記の猫に関する日・韓比較研究の結果を踏まえながら、愛玩動物としての猫のイメージが続く日本に比べ、そのイメージや認識が変わりつつある韓国の現代社会における猫のイメージや認識の変化について考察を行った。まず、韓国ギャラップ調査研究所で行った「韓国人の愛玩動物に関する意識調査」<sup>20</sup>の結果によると、韓国社会において愛玩動物が急激に増加したのは、90年代に入ってからである。それは1988年ソウル五輪と2002年韓日ワールドカップ開催を起点に国の政策として愛犬文化を普及したことと関係がある。このような社会雰囲気から愛玩動物への関心が高まり、それは猫への関心にもつながった。2002年の「ペットシンドローム」に続き、2003年には「猫シンドローム」、そして「クールな猫、超人気」（文化日報2003.8.11）、「猫シンドローム、浪漫・個性の象徴」（週刊韓国2003.8.26）などの見出しをつけた記事が掲載されるなど、2006年には大衆文化の一つとして語られ始めた（「大衆文化『猫キャラクタ』ブーム」ヘラルド経済2006.7.31）。翌年には「猫シンドローム」の

19 朴庚卿（2011）「動物表象からみた日本と韓国の比較文化論」法政大学大学院国際日本学インスティテュート修士論文。

20 ・調査機関：韓国ギャラップ調査研究所・調査地域：韓国全国（済州島除く）・調査対象：1992・1993・2002年一満20才以上男女、1997年一満18才以上男女（無作為抽出）・調査方法：自宅訪問、個別面接、複数回答。



原因について取材した特集記事も出た。この記事によれば、猫を飼う年齢層は主に 20～30 代の女性であり、ブームの原因は日本漫画やアニメの影響や独身の増加、犬より世話が楽、最後に経済的な余裕にある<sup>21</sup>。

しかし、大衆文化として猫が語られるようになったのは、上記の外部的要因だけではなく、韓国人が猫そのものに関心を持つようになった手掛り、すなわち、大衆の共感を呼び起こした「何か」があると思われる。そこで「猫シンドローム」が起きた頃、大衆的に人気を集めた猫が登場する映画、歌謡、ドラマ<sup>22</sup>を中心にその「何か」についての考察を試みた。詳しい分析内容は省くが、考察した映画、歌謡、ドラマで、今まで既成世代の社会でマイナーやタブーとされた対象を猫のイメージを借りて取り上げることにより、若者を中心に共感を呼び起こすきっかけとなった。同時に、猫に対する認識の変化にもつながったと思われる。

このような認識の変化は、ただ映画や歌、ドラマだけではなく、社会の時代背景を反映しての変化であろう。個人の個性と自由、独立的な性向が強い若者にとって、既成世代の社会において求められた「従う犬」より、気まぐれではあるが形式にこだわらない、自由な発想で自分なりのやり方でやっていく「自立的な猫」のほうが共感できる存在として認識されるようになったと思われる。さらに、そのような視点から、自分を映し出す「鏡」として猫を語るようになったと思われる。韓国における猫は、もはや社会のマイナーではなく、個性のある新世代を代表する時代のアイコンとして、魅力的なものとして認識されるようになったのである。このように、韓国における猫の認識のあらわれ方は、新世代の登場を含む韓国社会の変化とその歩みを共にしているといえるであろう。

猫に関するイメージや認識の変化はここで終わることではない。若者を中心としたこのような認識の一方では、野良猫の個体数増加による主民の被害が問題化され、2002、2003 年巨文島では大規模の猫を殺処分した事件などの社会的問題が続いている。それと関連して野良猫の実相と人間と猫は共生できるかについて考えるドキュメンタリー（「人間と猫」EBS、2009 など）も放送された。このように新しいイメージや象徴が生まれた裏には社会問題としての動物の影も浮かび上がる。今後猫に対する認識はどのように変化し続けるのか。猫を含む動物に対する認識の変化に注目することが今後の課題であり、それは社会の変化を読み取れる一つの手掛りになるとと思われる。

とりわけ、韓国においてまだ活発な研究が行われていない現代社会における動物の表象を考察することにより、変化する動物に対する認識と、変化の背景にある社会や文化などの諸相をも考察できるであろう。そのような研究の一環として、まずは現代社会の諸相を反映もしくは再生産するメディアにおける動物に焦点を合わせ、事例を分析・考察し、そこから社会や文化現象を考察していきたい。そして、その過程で浮かび上がった現状と日本文化との関連性を探り、比較分析することによってさらに深みのある研究につなげられると思われる。

## おわりに

以上のように、両国において人間と動物の関係に関する研究をリードしていると思われる研究会や学会の動向を視野に入れながら、これまで行われてきた学際的な研究成果の現状を整理してみた。以下では、これまで述べてきたことをごく短くまとめると同時に、今後の課題を挙げておくことでおわりに代えたい。

日本の「動物研究会」や「ヒトと動物の関係学会」、韓国の「人間動物文化研究会」における研究成果を一瞥する限り、両国とも人間と動物の関係の学際的研究という共通テーマを扱っているものの、研究の方向性においては若干異なる点もみられた。日本における研究は、現代社会における人々の動物観や動物と人間の共生に関する問題点を解決するところに重点がおかれている反面、韓国における研究は、人間と動物が共存するなかで形成された文化的な面に重点を置きつつ、いわゆる「民族の象徴」としての動物に焦点を当てた「韓国学」的な様相をみせた。さらに、現代社会のなかで動物と共生する方法や問題解決に関する研究は、個別的な

21 박주연 (2007) 「猫と一緒に幸せです！」 ニュースメーカー 737 号、京郷新聞社、55～60 頁参照。

22 映画「고양이를 부탁해 (子猫をお願い)」(2001.10.13)、체리필터 (Cherry Filter) の曲「낭만고양이 (浪漫猫)」(2002.8)、ドラマ「옥탑방 고양이 (屋上部屋の猫)」(2003.6.2～7.22)。

研究に留まっており、学際的研究はまだ本格的に行われていない。

日韓両国の研究成果の中で注目されるものとして、日本の場合は、人文学と他の学問との融合を試みた『ヒトと動物の関係学』と『人と動物の日本史』があり、韓国の場合は『文化で読む十二支神シリーズ』が挙げられる。前者は通時的・共時的観点から人間と動物の関係を総合的に捉えようとした先駆的な研究であり、今後の研究方向に関して示唆する点も多い。後者の場合は東アジアにおける比較文化論の可能性を探る研究であり、「一匹の虎が証言する韓中日の文化」という言葉に象徴されているように、比較研究と通して「東アジアの文化コード」を描こうとした研究としてその意義は大きい。

このような先行研究の成果を十分に活かすことが何よりも必要であるが、すでに明らかにしたように、本稿は今現在の研究動向を把握することに重点を置いた関係で、個々の研究分析や相互関連については断片的で仮説の域を出ていないものである。これに関しては、今後深度ある分析を行う予定である。

これに加えて、現代社会にまで視点を広げ、現代人の価値観を伝達・再生産する役割も担っているメディアのなかでの動物イメージや役割に焦点を当てて、それが社会のなかで持つ意味や象徴的意味を探っていきたい。またそこから浮き彫りになったことを比較分析することにより、日韓における「動物文化図」を描くことを試みる。このような比較考察を通して得られた日韓における「動物文化図」は、同時にその社会を構成している人間についての考察にもつながるはずである。

## 参考文献

- ・ Elmer VELDKAMP (2005) 「文化の媒介物としての動物—犬をめぐる韓国・日本・ヨーロッパの関係」『次世代人文社会研究』 Vol.1, 東西大学校日本研究センター、409～420頁。
- ・ アーロン・スキャブランド (2000) 『犬の帝国』本橋哲也訳、岩波書店。
- ・ 吉野裕子 (1980) 『狐—陰陽五行と稲荷信仰』(ものと人間の文化史 39) 法政大学出版局。
- ・ 金宗大 (1977) 『十二支の民俗と象徴①犬』国学資料院。
- ・ 高柳敦他「日本人の動物に対する態度の特性について」『造園雑誌』55巻5号、25～30頁。
- ・ 人間動物文化研究会編 (2012) 『人間動物文化』이담 books。
- ・ 菅豊編 (2009) 『動物と現代社会』(人と動物の日本史第3巻)、吉川弘文館。
- ・ 西本豊広編 (2008) 『動物の考古学』(人と動物の日本史第1巻)、吉川弘文館。
- ・ 石山玲子、松田光恵 (2009) 「テレビCMにおける動物描写の内容分析」『ヒトと動物の関係学誌』vol.23、48～59頁。
- ・ 石田おさむ他 (1992) 「日本人の動物に対する態度の類型化について」『造園雑誌』55巻5号、19～24頁。
- ・ 赤羽正春 (2008) 『敬われてきた熊』(ものと人間の文化史 144) 法政大学出版局。
- ・ 千鎮基 (2003) 『韓国動物民俗論』民俗院。
- ・ 中村生雄、三浦佑之編『信仰の中の動物たち』(人と動物の日本史第4巻)、吉川弘文館。
- ・ 中澤克昭編 (2009) 『歴史のなかの動物たち』(人と動物の日本史第2巻)、吉川弘文館。
- ・ 動物観研究会『動物観研究』No.1 (1990)～17 (2012)。
- ・ 朴庚卿 (2011) 「動物表象からみた日本と韓国の比較文化論」法政大学大学院国際日本学インスティテュート修士論文。
- ・ 李御寧編 (2009) 『文化で読む十二支神 虎』생각의 나무。  
(2010) 『文化で読む十二支神 兎』생각의 나무。  
(2010) 『文化で読む十二支神 龍』생각의 나무。  
(2011) 『文化で読む十二支神 蛇』열림원。  
(2011) 『文化で読む十二支神 馬』열림원。  
(2012) 『文化で読む十二支神 羊』열림원。
- ・ 林良博他編 (2008) 『ペットと社会』(ヒトと動物の関係学第3巻) 岩波書店。  
(2008) 『野生と環境』(ヒトと動物の関係学第4巻) 岩波書店。

(2009) 『動物観と表象』(ヒトと動物の関係学第1巻) 岩波書店。

(2009) 『家畜の文化』(ヒトと動物の関係学第2巻) 岩波書店。

WEB ページ

- ・ HARs ヒトと動物の関係学会 (<http://www.hars.gr.jp/index.htm>)
- ・ 動物観研究会 (<http://www008.upp.so-net.ne.jp/ATAnimals/>)